令和３年度　第２回酒田市総合教育会議議事録

開催日時	令和３年 11 月８日（月）13：30～15：20
開催場所	酒田市役所７階　703 会議室
出席者（構成員）	丸山至市長、鈴木和仁教育長、岩間奏子委員、渡部敦委員、神田直弥委員、村上千景委員
（オブザーバー）	教育参与　志水宏吉教授（大阪大学大学院人間科学研究科）
（市長部局）	竹越攻征総務部長、宮崎和幸企画部長
（事務局）	池田里枝教育次長、齋藤一志教育次長、高橋浩平企画管理課長、阿部周学校教育課長、五十嵐敏剛指導主幹、阿部武志社会教育文化課長、齋藤聡スポーツ振興課長、岩浪勝彦図書館長、杉山稔企画管理課長補佐、工藤充学区改編推進室長
協議事項	本市の教育を取り巻く諸課題について

１　開会

（池田教育次長）

これより令和３年度第２回酒田市総合教育会議を開会いたします。本日の会議の進行を務めさせていただきます教育次長の池田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。なお、本日はオブザーバーとして酒田市教育参与、大阪大学の志水宏吉教授をお迎えしております。ありがとうございます。また、本日５名の方から傍聴の申し出をいただいておりますのでご報告いたします。本日の資料につきましては、傍聴者へ配布させていただくことといたします。

初めに、丸山市長からご挨拶をお願いいたします。

２　あいさつ

（丸山市長）

厳粛な雰囲気の中始まりましたが、私はあまり緊張感を持つ会議ではないというふうな思いでいつも臨んでいるんですけれども、実際はマスコミの方も入りますし、でもやはりフランクな意見交換ができればいいかなと、生の声、生の議論を市民の皆さんをはじめ、関係者の皆さんに提供できたらなとそういう思いで進めさせていただいております。しかしながら今日は大阪大学の志水先生からオブザーバーとして入っていただくということで、実は私自身は若干緊張しております。志水先生から教育の参与としてお招きすると決まってから、何回かこういう場で志水先生と意見交換をする場を設けたいなという思いがずっとあって、今回初めて実現するという意味で非常に緊張しておりますし、でもある意味達成できたということで、喜ばしくも思っているところでございます。

第２回目の総合教育会議ということでございますが、今回のテーマ、来年度から本施行ということになるんですが、酒田市の小中一貫教育ビジョンについて意見交換できればと。そのためにも志水先生からおいでいただけたというのは大変ありがたいなと思いますし、有意

義な意見交換ができるのではないかなと期待をしております。実は、今年度に入って、鈴木教育長から我々がレクチャーを受ける中で、非常に私の胸に突き刺さったことがございます。というのは、志水先生の学力格差を克服するという本を紹介いただいて、その中で最初に学力格差は学校の問題である、しかしながら、その学校は教育の一部である、そして教育は社会の一部であるという言葉ですね。それゆえ学力格差の問題を考えるためには、そもそも社会というものをどう見るか。どのような社会を私たちが望ましいと見るのか。そういった問いに思いを致す必要があるというのが教育長から教えていただいたというか、志水先生の言葉を引用された事だと思いますけれども、正にその通りだなと。そういう意味では、私ども酒田市のまちづくりの一番重要な部分というものをある意味教育委員会で全部集約をしているわけです。文化もスポーツも一時期市長部局にあったんですけれども、教育委員会に戻したと、私の意志でそうしたんですけれども、そのこと自体は決して間違いではなかったなと思って今の言葉を受け止めたところでした。

ちょうど酒田市では総合計画の後期計画というものを作っております。今年と来年とで作るんですけれども、再来年度からの５か年間の計画を作るということで作業を進めております。ただ、本来は１０か年の計画で基本構想があって基本計画があるんですけれども、基本構想部分も見直しをしていこうというスタンスで今向かっている最中です。今日の志水先生のお話は、これはしっかり受け止める必要があるかなと思っております。単なる前期計画の見直しではなくて、大胆な考え方の転換というものも、ひょっとしたら必要になってくるのではないか。今回のコロナの関係で、学校の環境一つ見ても、GIGA スクールということで１人１パソコンになったり大きく変わってきているなという感じがします。ここはしっかりと議論をして今後の教育、まちづくりを考えていく必要があると思っております。そういった中で、来年度には酒田市として小中一貫教育というシステムがスタートするということで、非常に大きな転換期だと思っておりますので、今日は志水先生のお話もしっかりと聞かせていただいて、私どもの気付きに繋がって、総合計画がまたより良いものに変わっていければいいかなと、そんな思いを抱いたところでした。限られた時間、本当は何時間か集中してお話をして、お酒でも酌み交わしながらやればもっともっと充実した話ができるのかもしれませんが、それはコロナ禍が収まった後にそういう機会もぜひ持ちたいなと思いますので、今日のところは真面目にしっかり議論をして、その事を今日マスコミの方々も何社かいらっしゃいますけれども、酒田市が真剣に取り組んだということ、取り組んでいるんだということを県内にアピールしていただければ大変ありがたいとそんな思いを持ったところでございます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

（池田教育次長）

続きまして、鈴木教育長からご挨拶をお願いいたします。

（鈴木教育長）

改めまして皆さんこんにちは。まずもって丸山市長におかれましてはお忙しい中こういっ

た形で会議を設定していただきまして本当にありがとうございます。また、先ほどもご紹介ありましたけれども、今回オブザーバーとして志水先生からご参加いただけるということで、非常に光栄なことだなと思っております。

今日のテーマは小中一貫ですけれども、私としてはこの小中一貫の考え方というか取り組みが、先生は樹に例えてらっしゃいますけれども、私は背骨というかすごく大事だなと思っています。学校教育に限らず今社会教育文化課で取り組んでいるスクールプログラムですとか、アーティストインレジデンスですとか、そういった取り組みなども９年の中にきちんと組み込んでいく、９年で子ども達を育てていくという視点でそれぞれやっていた授業が、小中一貫を背骨として通すことで見直すことができるのではないかなと思っております。時間のかかることは百も承知の上ですけれども、とはいうものの各中学校区で非常に色々取り組んでいただいておりますので、思った以上に浸透してきているのではないかなと思っておりまして、楽しみにしているところです。急がず、だがしかし確実に前に進めていきたいと考えておりますので、今日は皆さま方から忌憚のないご意見を沢山いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

３　協議

（池田教育次長）

それではこれより協議に入ります。ここからは市長に座長をお願いいたします。発言の際には皆様は座ったままでお願いいたします。

（１）本市の教育を取り巻く諸課題について

（丸山市長）

それでは協議に入りたいと思います。今日は協議事項が１本ですので、まずは酒田市の小中一貫教育ビジョンについて若干ご説明させていただいて、そのもとで議論を進めてまいりたいと思います。では、学校教育課長お願いします。

（阿部学校教育課長）

資料をご覧ください。酒田市小中一貫教育ビジョンを作成するにあたりましては、志水先生から大変な助言をいただいております。この後も学力についてお話いただきますけれども、よろしくお願いいたします。この小中一貫教育を進めるにあたりまして、各中学校区の代表の校長先生方と教育長、教育次長を交えながら、４月と６月に推進会議を開催しております。そしてこの小中一貫教育ビジョンを作成いたしました。作成にあたりましては、一番大事なところ、酒田市の教育目標にあります「学び合い、ともに生きる、公益のまち酒田の人づくり」ということと、目指す人間像「自ら学び、考え、時代の変化に対応できるたくましい人」、それから「自分と他の人を大切にし、多様性を認め支え合う人」、それから「ふるさとの自然・歴史・文化を愛し、公益の心でこれからの社会を担う人」を育てるために、小中一貫教育を行っていくことを確認したところでございます。その下、つけたい力ということで、酒田市

版の「まなびの樹」というものを作成させていただきました。手段としまして、先生方も子ども達も保護者も、また地域の方々も分かりやすいイメージを持つために、志水先生の「学力の樹」の理論を参考にいたしまして、酒田市版のまなびの樹のイメージを考えたところです。まず、子ども達の力を伸ばすためには、教えるべきところを教え指導する指導的側面と、挑戦させる、考えさせる、経験させる支援的側面があると思っております。その指導と支援を通しまして、現在の学習要領から「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、それと「学びに向かう力、人間性等」を育成していきたいと思っております。そこで酒田市のまなびの樹におきましては、「知識及び技能」については「葉の力」として生きて働く概念として日常と関連付けながら、学びを更新していく力というふうに捉えています。２つ目の「思考力、判断力、表現力等」につきましては「幹の力」として未知の状況にもこれまでの学びを活用しながら考え対応する力と捉えております。３つ目の「学びに向かう力、人間性等」につきましては「根の力」としてより良い社会や幸福な人生に向けて学びを生かしていく力というふうに捉えております。そして、この根の力につきましては、先ほどご説明させていただきました酒田市の目指す人間像と関連させまして、自律する力、尊重する力、創造する力とキーワード的にする事で、広く先生方や子ども達、また保護者の方々にもイメージしやすいように考えました。

別紙の資料２になりますが、根の力の評価指標というものを設定しまして、それぞれの力について更に詳しく子ども達自身が振り返ったり、先生方も意識して指導したり、また支援したりすることができるようにこの評価指標を設けたところでございます。別紙をご覧になると分かると思いますが、自律する力であれば、①の「将来の夢や目標をもっている」から⑦の「学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる」までの７項目。また、２番の尊重する力であれば、①の「自分にはよいところがあると思う」から⑦の「学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」までの７項目。そして、創造する力であれば、①の「人の役に立つ人間になりたいと思う」から⑦の「算数（数学）の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」までの７項目。こういったものとして設定させてもらいました。この指標につきましては、全国学力学習状況調査のいわゆる児童生徒質問で回答したものを活用できるとともに、全国学習調査ですと小６と中３だけですけれども、このアンケートにつきましては、小学４年生から中学３年生までタブレット端末を使ってアンケートすることによって、全市的な傾向だけでなく経年変化であるとか、また各校または各中学校区での傾向等も分析できるようになっております。

資料１にお戻りください。次の９年間を貫く「まなびの軸」ということでお話申し上げます。この軸としましては、中学校区ごとに「課題の分析」や「つけたい力」について協議を進め、各中学校区における目指す子ども像を共有するとともに、「重点教科」や「軸となる特色ある取り組み」を検討して、系統性・一貫性のある９年間の教育課程を創り上げていきたいと思っております。その際の大きな視点としまして、２つ示させていただきました。１つ目としましては、一人一人に応じた学びの保障と協働的な学びの充実を図るという視点、もう

１つ、主体的な経験や他者との関わりから豊かな「根っこ」が育っていく視点です。具体的には下の方にありますけれども、例えば学力調査や様々な生活調査の結果を小中学校で共有し協働で分析しながら、課題やつけたい力、指標等を明確にすること。それから、現状分析から明らかになった課題の解決に向けて、それぞれの中学校区において小中９年間で育みたい子ども像を明確にし、学校、家庭、地域で共有するということ。それから３つ目として、教師が「育てる」という視点から、子どもが「育つ」という共通理解のもと、他と比べるのではなくて、一人一人の９年間の成長を評価・支援するということです。そして各中学校区におきまして、「重点的な取り組み」を設定し、９年間の教育課程を系統的に編成、実践していくということです。これにつきましては、資料４にも小中一貫にするとどんなことができるかということで、様々な取り組み事例を挙げさせてもらっていますけれども、例えば中学校の先生方が小学校６年生に算数や英語、音楽や美術などを教えに行くという時間の設定等も考えられます。また、算数、数学の教材を各中学校区内の小学校は同じものを使って、中学校まで繋げるということも考えられます。それから現在、１人１台端末に入っている学習ドリルのソフト、ｅ－ライブラリは、小学校１年から中学校３年生まで全ての問題がどの学年でも使うことがきますので、例えば計算や漢字のドリルなどを小中一貫でやることができるかなと思います。更には、英語においても小中一貫の視点で同じ ALT が小中で授業を持つということも考えられます。今現在進めている学校もございますが、話し合い活動の充実のために、例えば市松模様の形態で話し合いを進めたり、小中では同じプランニングノート、計画とか実行などありますが、そういったものを使って、主体的な学びの取り組みを行っている中学校もありますので、今後この小中一貫教育を酒田市全体で進めていく中で、更に有効な取り組みなどが出てくることを期待しているところです。資料に戻ります。更に下の方になりますけれども、学校間の小中の教員の交流を推進するとともに、小学校中学校それぞれの指導の良さを活かしながら一貫性のある学習スタイルを構築していくことや、地域の特色ある資源や外部人材の活用であるとか、また１人１台端末の有効活用であるとか、異年齢交流を通した体験活動など子どもの学びや関わりを大事にしたいと思っております。

この小中一貫教育の効果については、先ほど根の力については指標を設けてと申しましたけれども、葉の力と幹の力につきましては、資料３に数値的なものもありますが、こういったものを活用させていただきながら、目指す子ども像の実現に向けて方策を検討、改善していきたいと思っております。各学校には小中一貫教育推進の案として、各小学校長会、中学校長会の折にビジョンをお示しさせていただいております。このビジョンに沿いながら各中学校区での児童・生徒の実態をもとに、各中学校区で令和４年度からグランドデザインを作成し、取り組みを推進していくようにお願いしております。また、保護者や地域の方々に対しましては、１２月１日発行予定の「きょういく酒田」において、この酒田市小中一貫教育ビジョンについてお知らせをし、学校だけでなく保護者や地域の方々の理解を得ながら進めていきたいと考えております。以上、簡単ではございますが、こういった方向で小中一貫教育を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（丸山市長）

ありがとうございました。ビジョンの中身についてご説明いただきましたけれども、それでは志水先生からこういったことに対するご助言でも結構ですし、先生の「学力の樹」についてでも結構なんですが、まとまった時間を確保しておりますので、先生の方から少しお話をいただければなと思います。それを踏まえて教育委員の皆さんと意見交換できればと思いますので、よろしくお願いいたします。

（志水教授）

改めまして、教育委員の皆さん初めまして、志水と申します。昨年度に教育参与といいましょうか、酒田の教育にアドバイスを欲しいということをご依頼いただきまして、昨年度末に１回と、今年になって７月だったと思いますけれども１回、それと今日ということで３度目になります。せっかく来させていただいているので、ぜひ現場も拝見したいとお願いしまして、７月に小学校１校、中学校１校。今回も明日ですね同じように１校ずつ拝見させていただいて、子ども達の姿を見せていただくことになっております。

私出身は兵庫県の西宮市というところに住んでおりましたけれども、酒田のまちは公益と交易のまちと HP などを見るとありました。素晴らしいスローガンですが、西宮市について皆さんご存じのことありますか。１つは奈良の酒と言いまして、酒田も酒処だと思いますけれども、かつては非常に大量のお酒を産出するまちとして今もその伝統はあります。もう一つは甲子園のまちが西宮市で、一応私もタイガースファンですので昨日久しぶりに野球の試合見ましたけれども、負けてしまいまして終戦ということになりました。

「学力の樹」というものを提唱してきまして、その話を中心にやらせていただきたいと思います。その前段階でお手元の資料、コロナの中で何が起こっているんだということですけれども、私の専門が教育社会学という学問になりまして、社会の中での教育の在り方を各種のデータに基づいて話をするというそういう学問になります。データというとき、統計データはもちろんアンケート調査とかありますけれども、現場において先生方や子ども、親の声を聞きながらということを大事にしてきたつもりです。テーマとしては、私は学力の問題を中心にやってきましたけれども、もうちょっとその背景を言うと一般の言葉でいうと「教育格差」ということになると思います。格差がなぜ生じるのか、なぜ拡大するのか、それを縮小する手立てはどんなことがありうるのかというようなことを特に学力面に絞ってやってきました。コロナの中でいうと、メディアでもよく言われますけれどもやはり格差拡大の傾向、懸念があるとずっと言われていると思います。コロナは国民全部を直撃しているわけですけれども、子どもの教育について言うとやはりシンプルに言うと豊かな層とそうでない層で影響力が違うということです。私自身は家庭環境の違いが子ども達の育ちにどういう影響を与えるということをやっておりましたので、コロナになったらその関係性がより強まるといいますか、例えば ICT の活用みたいなことで言うと、大阪の話ですけれども、コロナになった直後から私立学校などではどんどんどんどん色んなものを導入して対応を進めていったという話があります。公立の学校ではそんなに予算がありませんし余裕もありませんから、なん

とか授業を組み立てるわけですけれども、子どもの学びをある時点で切取るとパっと開きが出るんじゃないかという懸念ですね。私はまだ１年経ってませんが、この間学校が２極化しているという本を出版しましたけれども、ずっと家庭の格差が学力の格差、個人の格差に繋がっていると考えてきたんですけれども、都市的な状況では学校間に格差が出てきているという傾向が非常に顕著になってます。地元の大阪市では、学校選択制というものを取っていますので、やはり学校の評判を聞いて保護者の方が学校を選択しますので、言葉は嫌いですけれども、勝ち組の学校と負け組の学校みたいなものが公立の中でも顕著になってきているというのが一つありますので、それは懸念されるところです。もう１点は、先ほど言いました ICT の活用とか AI の活用というのがどんどん学校現場に入ってきていまして、７月にこちらにお邪魔した時もタブレットを子ども達がお持ちで、先生方も一生懸命学んで授業を変えようとしておられる姿がありました。全国的です。若い先生はいいんですけど、普段の生活と結びついて。私も６０代ですけれども、学校では５０代の先生なんかはそれにフォローするのは現実的に四苦八苦しているという側面があるということですよね。ただ、国や文科省の方はこれを機にどんどん進めていきたいという意図がありまして、私の目から見てもパソコンなどの機器が教育現場に導入されている度合いは、アジアの中では日本はかなり明らかに遅れているというか遅いところがあります。そのために、キャッチアップということで、キーワードでいうと「学びの個別化」とか個に合った学びをどんどん進めよう、更に個々の力とか関心に相応しい教育を展開しようという「最適化」とか言いますが、そういう動向が非常に強まっていて、酒田のまちにもそういう動きは当然入ってきているんじゃないかなと思います。私が今までやってきたこととの関係でいうと、それも大事なんですけれども、皆がパソコン画面見てそれで授業が終始するとなるとまずいなという気持ちもあります。説明を省略せざるを得ませんけれども、やはり学び・勉強・学習というのは人との関わりの中で展開するし高まっていくという、言葉でいうと「学びの集団性」とか「協働性」が私は今まで学校現場で沢山見てきましたが、非常に重要かなと思っているんです。今日的課題としては先ほど「個別化」「最適化」みたいなものと、基本的にある「集団性」「協働性」みたいなものを組み合わせていくということですね。それが今から期待されていると思います。その中で、酒田市は新しい取り組みを始めようとしている。その時に、私が言ってきた「学力の樹」の考え方を非常に忠実に採用していただいてありがたいことですけれども、自治体でいうと幾つ目かの自治体になるということです。お手元の資料に樹の絵があります。私が生まれ育った家が材木屋をやっていたもので、実は何でも材木で考える傾向がありまして、学力問題の時も今から１５年くらい前ですか、こういう捉え方をすると分かりやすいんじゃないかなと思ったのが最初です。ご説明いただいたように３点セットで捉える。樹は生き物ですので、これらが有機的に組み合わさって１つのものができているというイメージです。樹の右側に書いてます「葉の力・幹の力・根の力」は私の言葉ですが、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」というのは学習指導要領がうたっている理念というか、日本国中これで動いているんですが、この３つを樹のパーツに当てはめたら分かりやすいんじゃないかということです。その時に、まずそれが１つなんですが、一番言いたいことは、

３点セットのうちの相手が子ども達ですから根っこの力が一番重要だということをずっとお伝えしてきました。私個人の頭の中では、根っこというとざっくりし過ぎてますので、言葉でいうと３点セットでいつも３つになりがちなんですが、根っこの要素として３つあるんです。１つが「自尊感情」、２つ目が「学習習慣」、３番目が「目的意識」です。これは大阪の先生方と一緒に色んな活動をしたり、自分の頭の中とか研究者などとも考えて今の時点での結論なんですが、根っことして重要なのが「自尊感情」と「学習習慣」と「目的意識」じゃないかと。他にもきっとあると思うんですが、沢山あり過ぎても複雑になりますので、「自尊感情」というのは分かりやすくて自分が好きだとか、自分自身を肯定する感覚ですね。あるいは自分はやれるんだというような自信とか、そういうものが当然ながら学力を身に付けていく上での大事なパーツになると。説明すると長くなりますので形だけにします。「学習習慣」２番目です。明日も酒田の先生方にお話しするときに言おうと思っているんですが、私は意欲より習慣が大事というような捉えをしております。学校の先生方は学習意欲というものを非常に注視されて、もちろん大事なんですけれども、それだけでは意欲に働きかける指導・支援だけでは短期的にというか表層的に終わりがちであると。効果なるものが続かない。それを克服するために習慣化していないとダメだろう。なぜならば習慣が意欲を生むからだということです。委員さんもおやりになったかもしれませんが、市長さんも教育長さんも、ゴルフってあるじゃないですか。私若い時何度か誘われて行ってみたんですが、ボールが小さすぎて自分には向いていない。私は学生時代からサッカーという競技が好きで、今も時々学生と蹴ったりしているんですけれど、中学校でサッカー部に入って、サッカー習慣が人よりも沢山ある。そうするとやり続けたいとかボール蹴りたいとか自ずとなりますね。ゴルフの場合は、もうすぐに止めてしまって、自分は無理かなと思って習慣化が全くされていません。だから誘われても行こうとは全く思わないということになります。一事が万事そうで、学校での学習についても全く同じように、いい習慣を持って色んな経験で分かった、できた、褒められたと思ったら、次の学習に意欲を持って繋いでいけますが、低い点数しか取れないとか、バカにされたとか、ある挫折を味わったりするとダメだというふうになって、習慣化されないと意欲が沸かないと思います。「目的意識」というのは、学年がだんだん上がっていくと自信があって習慣ついていたら大概色んな課題をクリアしていけますけれども、やはり学校の勉強は非常に難しくなりますので、何のためにこれをやっているのかということが個々の子ども達の心の中にストンと落ちていないとなかなか厳しいということです。大阪の中学生は、前よりちょっと良いんですが、あまり全国的には振るいません。大阪の行政の人たちはしゃかりきになってやるわけですけど、私が思いますのは、大阪というのは日本の中でちょっと独特なところがありまして、酒田もそうなんだと思いますが、商人の文化というのは非常に根強いです、未だに。商都大阪のアイデンティティでずっとやってきたということで、それとたぶん関係しているんですが、お笑い文化というか吉本文化というのがあります。なので、何が言いたいかというと、自分の周囲にいる大人たち、ロールモデルとなる大人の中には学校の勉強をばーっとやってネクタイして仕事している人もいるんですけれども、そうじゃなくて商店をやっているとかお笑いをやっている人もいるわけです。中学生位になると自分は

どっちかな、何やろうかなといった時に、こちら側に傾くことがたぶん多いんですね、東京の子ども達と比べると。私東京と大阪はよく知っていますので、だいぶ違うんです。自ずと目的意識が違うので、平均点を取った場合の点数は大阪は若干下になる。もちろん頑張っている子もいる。他の道に行っている子もいる、そういうことです。秋田県に行ったときに、秋田の教育長さんがおっしゃってましたけれども、秋田の場合、小中は良い。高校になると共通点数がそんなに振るわないので困っておられたんですが、やはり秋田の若者が思い描く将来、その中には地域で頑張ろう、そんな都会ぶって出なくてもと言う層がかなりいるじゃないですか。酒田も同じかもしれません。なので、単に数字だけ、平均点だけ比べて、秋田の高校でコケているなんて言うのはナンセンスなんです。子ども達の将来に応じた力が付いていく場合と、点数化できる部分と、そういうふうには馴染まない部分もあるというようなことを感じます。私大阪大学ですが、すぐ隣の自治体で大阪府茨木市というところがありまして、今から１０数年前に採用してくださって、今回の酒田のビジョンと非常に近いものを教育委員会の方々がお作りになって、その時に想定された根っこの力というのは、茨木市バージョンですけれども言葉でいうと４つ提示されました。自分力、学び力、つながり力、夢力です。割と私のバージョンと結果的には似ていて、夢力というのは「目的意識」に近いということになります。学び力は「学習習慣」と非常に近いと思います。といったように、そういうものを作られて、茨木市のすごいところは点数の部分ももちろん大事なんですけれども、点数上げろというふうに教育委員会が指導して先生方もしゃかりきになったわけではなくて、大事なのは根っこであると。これは学校教育の中で育んでいきましょうと、そういうアプローチを取られました。そうすると、５年くらい最初は小学校だったんですが、その後６年目からは中学校で、A 問題、B 問題の平均点がバーッと上がったということがありました。それは非常にモチベーションを無くして懐疑低迷していた子がやる気になったという部分と、力のある子が更に前向きになってどんどんやったと両者相まって、分析するとそういう事実がありましたので、もちろん点数上げることは結果の１つで、それが目的になってはいけないと思いますけれども、何が言いたいかといいますと、根っこを育てることが一番大事だということです。酒田の教育ビジョンを拝見した時に、非常によく練られていて自立する力、尊重する力、創造する力という言葉が与えられています。根っこのところを先ほどご説明あったように指標化するのはどうなんだという言い方もあるかもしれませんが、現場のこれが１つの励みとなるための目安という感じです。コロナでも必ず体温計で計るのと同じように、根っこの力はどうかな、足りないところはないかなとチェックに用いるということです。そこから日々の指導の在り方とか子ども達との関係とかを見つめていっていただければ、私の経験から言えば結果が自ずとついてくるという事になろうかと思います。

あとは小中一貫ということでお話がありました。やはり今までやってきて第一に感じるのは、小学校文化と中学校文化の違いというテーマです。秋田県と並んで学力テストの結果が良好なところに福井県があります。福井の特徴は、最初訪問した時に驚きましたけれども、大概の先生が小学校と中学校両方経験する。採用するときも両方持っていることが基本的に重視される。先生方も両方経験されるのが、今日では変わってきているかもしれませんが、

私がよく行かせていただいていた頃はそうでした。なので、一般的な小学校文化と中学校文化とのギャップみたいなものは当然平坦になっているといいますか、他所に比べるとそれが大きいと思いました。大阪辺りでも進んでるんです。あまり進んでないところに行くと、やはり中学校の先生は、小学校でもうちょっと基礎基本をきっちりやっていてくれたら我々苦労しないのになと言う。小学校の先生は、手塩にかけた子ども達が中学校に行くとちょっとぐれてしまうとか、表情変わっているということありますよね。それを教師というか教員の方が日々情報交換して、顔付け合わせて一緒にやっていこうぜという形を作ると事態は一挙に改善されるように思います。言いたいことの１つはそれです。なので、力入れてこれからお進めになっていくと思いますけれども、ともかく小学校の先生方と中学校の先生方が色んな形で交流する場を沢山作っていくということです。それがないと小学校の先生方は校区の中学校にどんな先生がいるか分からないとなるじゃないですか。小から中、中から高、高から大学は少し種類が違いますけれども、駅伝みたいな感じでバトンタッチですから、お互い気持ちを揃えてバトンを繋がないと落ちるのは子どもですので、そういう意味では不可欠な連携が必要かなと思います。酒田市がそこまで考えているかちゃんと確かめていないんですが、小中一貫教育というのは、校舎が離れて今まである既存の小中が連携する連携型ということもあれば、新しい校舎を造って一緒にやるというものもあって、かなり過疎地だったら１個をバーンと造るとか、都市部だったらちょっと１個を造って拠点にしようとかいうのが進んでいます。いくつか訪問させていただいた場合に私が思っていることですけれども、昔、中１ギャップと言ってギャップは良くない、不登校が増えるからという議論がありました。もちろんそうなんですけれども、ギャップが無さ過ぎて滑らか過ぎるのもどうかなという感じが私にはあります。子どもは苦もなくスルスルスルと中３までいくような、例えていうとですよね。その形がいいかどうかは非常に論点が分かれます。もちろん非一貫してたらダメですよ。小学校で言うことと中学校で言うことが真逆で、子どもが何だこれとなったら困りますので、一貫性は必要なんですけど、なだらかな方が良いとは私は言わない。逆に階段状になっているというか、ステップがあって、それで子ども達がそのステップを登っていくという形を作りたい。もっと具体的に言うと、だいたい１年生から９年生って一貫校の場合言うんですけれども、９年間そのままやると当然マンネリになりますので、私が見た中では４・３・２が一番多かったです。３・３・３とか４・２・３だったら小中の区切りそのままですよね。子どもの心身の発達を見込んだ時に、４・３・２が良かろうという判断をされている学校が結構全国にあります。その時に問題になるのが、昔は小６が小学校の大将でここでピークがあって、また中１でスタートして中３でピークがあって、ピークが２つあるわけですけれども、４・３・２でやると６年生はピークではなくなる。そうすると小４と中１に持ってくればいいとも言えるし、中３とピーク３つになりますので、どこか低くしてあと２つとかですね、色んな考え方があると思います。言いたいことは、９年の中のメリハリと言いますか、その観点がカリキュラムとか作るときには、あるいは指導の体系などを作るときには、今まで見たこととの関係でいうと必要かなというふうに感じております。また今後このビジョンに基づいて取り組みが進んでいくと思いますので、気付いたことがありましたらまたお

伝えさせていただければなと思います。

（丸山市長）

ありがとうございました。非常に私個人的にはいい話を聞けたなと、特に９年間のギャップ、ある意味ギャップがなければいいというものでもないということについて、私なんか小学校３校、中学校２校、高等学校２校ですから、その都度ギャップ抱えながらきたわけです。でもダメな人間にはなっていないなという感じはするんですけれども、今先生がおっしゃったことをそうだそうだと聞いていました。ダメだからいいかというとそうでもないんだよねという思いは全く同感でございました。色々なお話をいただきましてありがとうございました。

今日は、教育委員の皆さんとの意見交換ということがメインですので、今の話の中で感じたこと、あるいはこれはどうなんでしょうというような話があれば遠慮なく出していただければと思います。先ほども言いましたが、あまり堅苦しく考えておりませんので、フリートーキングでどうぞ。本来ですと、じゃあ渡部委員からと言いたいところですけれど、そこはあまりこだわりませんので、どうぞ自由に。頭の整理も必要ですね。ここはやはり神田委員からお願いします。

（神田委員）

大変勉強させていただきました。その一言に尽きるんですけれども、それを自分の中で更にそしゃくしていかなきゃいけないという気持ちが強いんですけれども、元々この話を伺ってこの「まなびの樹」というこの図を見たときに、これがどういうモデルなのだろうかというのを考えたんです。まずは根っこがしっかりしていると、幹が育っていって葉が生い茂って、葉が生い茂ると光合成ができるので更に根っこが充実してというような円環モデルなんだろうと思いましたので、そう考えていくと一番重要なのは根っこなんだろうというようなことは感じておったんですけれども、正にその通りなんだということを実感しました。話が飛び飛びになってしまうかもしれないんですが、志水先生のお話を伺っていて、根っこが重要な中で、特に大切なのが意欲を高めるということではなくて、学習習慣の後で意欲を高めていくほうが重要で、良い習慣を持った上でその次に良い経験をしなければならない。それが意欲に繋がっていくというときに、習慣自体を付けさせるというのは強制してもできるかもしれませんが、そのあとの良い経験というところですね。それが、今教師が褒めるということもあると思いますし、自分自身が振り返りを通して頑張れたなという気持ちを持っていくことが、更に意欲を高めることに繋がっていくということにも繋がっていくと思うのですが、例えば、褒める褒めないというところも、常に褒められるかというとまた本人の特性によっても褒めるのが重要な人もいれば、そうでなくて問題点を指摘してもらった方が嬉しい人もいるでしょうし、また自分自身の振り返りのスキルが高くない人もいるのかなと思う中で、実際現場としてこの良い経験を積ませてあげるというのはどういうふうにしたら良いのかなというところを疑問に思いましたので、その点についてご教示いただけるとありがたい

と思いました。

（志水教授）

良い経験というと多種多様に有り得ると思うので、話をちょっと限定させていただいて、褒めることの意味みたいなことで考えると、私の実家の話をするんですが、先生も大学の先生ですので色んな機会があったんじゃないかと思います。３０代前半で在外研究で子どもがその時いたんですが、イギリスの大学に２年間勤めるという経験を持つことができました。元々私教育の専門ですし、子どもがいて子どもが現地の学校に行ったりしたので、非常に日本と全然違うなと思うこと沢山あったことの１つが褒めるということでした。今は日本のお母さん方、お父さん方は子どもを褒めていると思いますが、今から３０年前はそうでもなくて、日本の場合は叱咤激励するというか子どもにもっと頑張れ、こっちも頑張れみたいな、私その頭あったんですが、イギリス人は非常に褒めるということがありました。逆に日本だったらアドバイスでこれはこうした方がいいんじゃないかとか、不得意じゃないところがあったらやった方がいいんじゃないかというのが、イギリスのご家庭を見ているとそっちはほっといて、その子の良いところだけ伸ばすみたいな極端に言うとそういうことがあったんですね。もちろん子どもの個性にもよりますけれども、そこから日本も時代が変わっていって、例えば自分の経験の中でも良かれと思って叱るとか、怒るということをすると、子どもとか若者が離れていくという経験をその後してますので、褒めると厳しくするということのバランスはたぶん９対１くらいでいいんじゃないかなと、５対５でやると今の時代難しいかなと思ったりします。褒めるというのは、先ほど言った３つのうちの「自尊感情」とやはり非常に結びついていて、我々の世界では自己効力感という言葉がよく使われます。自尊感情にいろいろある中で自己効力感が特に大事かなと私は思います。それは何かというと、自分はそこそこの事ができる。もっと抽象的に言うと、自分が他者とか環境に働きかけるとちゃんとフィードバックしてくれるとかですね、手応え感と言いますか。それを持っている子ども、大人はやはり強いんですね。どんどん働きかけてどんどんリターンも返ってきて次に向かえる。低い子どもがいるんですよね、大阪には特に沢山いるんですが、それはなぜかというと明らかに、シンプルに言うと家庭の中でのポジティブな声掛けや関わりが非常に少なかった。スキンシップから始まって、頑張っているねとか、君がいてくれて良かったねとか、そういうのがなく生まれて育ってきて教室に座っている子がいるんですよね。赤ちゃんの段階から自己効力感が高い赤ちゃんって考えにくいでしょ。１歳、２歳、３歳になると、周りの他者との関係で、お腹が空いてギャーっと泣いたらおっぱいをもらえたとか、おしっこをして泣いたらおむつを替えてもらって気持ちよくなったとかの中で自己効力感が育まれるので、ある行為をしたときに周囲の皆はどういう対応をするかとか、褒めるというのは一番典型としてその反応が周りからあるかないかでこちらの経験として全く変わってくると思うんです。端的に言うと、何かやって何か達成した時に褒める、ポジティブな声掛けをするというのは極めて大事かなと思います。神田先生のご質問から逸れたような気もしますけれども。

（神田委員）

ありがとうございます。あとは、具体的なこの進め方に関する事、これは質問というよりも意見になってしまいますが、すでに先生方大変お忙しい中で小中一貫がスタートするときの現場としての受け止め方がどういうことなんだろうかというのがちょっと気になりました。理念としては大変すばらしいですし、今日のお話を伺っていても色々なことができるであろうと期待感も非常に大きいわけですけれども、実際に様々な手段が示されている中で、新たにこれをやるのかということになったときに、どんな感じ方になっているのかというところもフォローしていかないと上手くいかない部分も出てくるのかなと。その時に改革の進め方としてとにかく現状よりも前進していくという形になると、フォアキャスティングというアプローチになりますけれども、そうなると今よりは一歩進めばよいということになると、何でもよいからとにかくやるということになってしまう部分もあるんではないかと思うんです。そうすると、内容が形骸化していってしまうと思うので、最終的に例えば５年間で何を実現するんだというような目標があって、そこから逆算をしていきながら進めていくアプローチを取っていき、先ほど具体的な指標として根っこの部分が成長しているかどうかというのを示すような指標もありましたので、ああいったところを見ながらできる限り目標に向けていくようなアプローチを取った方がいいのかなというように感じました。ただその場合には、おそらくやるべきことが多くなってくると思いますし、負担も大きくなってくると思います。どんなことを取り組むべきか、創造的な取り組みをするときには心の余裕がないと到底できませんので、やはり業務の負担軽減というところとセットでやっていかないと中身が上手く伴わない可能性が出てきてしまうのかなというところが懸念される部分でもありましたので、他の業務の負担軽減とセットでぜひ進めていただいて効果が出るようにしていただければなという意見でございます。

（丸山市長）

ありがとうございます。おっしゃる通りですよね。今でも先生方は忙しい忙しいと言って余裕がない中で、本当に働き方改革どころではなくて、劣悪な環境の中で仕事をされているのにこういったことをやる、特に資料４にあるような１から１５までのこういった作業を新たに付け加えていくというのは、何かを切り捨てないとなかなかやれないですよね。時間は限られるわけですし、自分の能力も限られるわけですから、そこは具体的に教育委員会としてどのような指導をされるのかというところは私も少し聞いてみたいところがあるなと思っておりました。

（鈴木教育長）

この資料に書いているのはこんなこともできますよという文科省が出しているガイドラインに書いてあるものですけれども、今私たちが各中学校区で校長先生方とお話をしているのは、その前に必要感は先生方十分理解いただいているんですね。問題は今神田委員からあった通りだと思いますので、その中で自分たちの学校区ではまず何を柱にしようかということ

で、取り組めることが３つ４つあったとしても、１つに絞ってその１つについて９年間自分たちの学校区で一貫性のある、系統性のあるものを作っていこうと。１つそれができればおそらく色々なところに波及していくのではないかと思うんです。その１つを取り組む事で、例えば学習の習慣化だとか、そんなことも身についてくるのではないかと考えております。今私が個人的に考えていたことは、各中学校や小学校の校長先生に相談しながら詰めようと思っていたことは、もう少し目に見える進め方と今お話ありましたけれども、ものがないと尚且つ目に見えるような結果がないと、なかなかやりがい感というかそういうもの見えないと思うので、例えば小学校４年生だったらこれくらいの漢字が分かったらいいよねとか、これくらいの計算ができていいよねとか、そういったそれぞれの発達段階に応じてここまでは習得してほしい、基本的な漢字だとか計算だとかそういったようなことを認定していくような。しかもそれを新たに採点するということではなくて、GIGA 端末を使った仕組み、その子たちが自分の学びの時間軸の中で到達できるなと思った時に受けられるような仕組みがあると、モチベーションに繋がっていくのではないか。そういったことがもし１つの仕組みとしてでき上がっていくと、今やっている色々なものを無くしていくこともできると思うんです。なので、無くせるものを無くしながら、先生方の負担を軽減しながらも、それぞれの中学校区で特色のある取り組みに繋げていければと思っているところです。

（志水教授）

話を聞いていて思い出したというか、１つ情報としては、ここでいう小中一貫、一緒の学校でやりましょうというのではなくて、既存の学校が連携してやりましょうというスタイルは、大阪府はかなり進んでいるんです。それはなぜかというと、次が大事だと思いますが、連携しないと学校が回らないという状況があった。もともとは生徒指導、荒れの問題です。荒れた子どもが多い時に、解決策として色々な手立てを先生方は取るわけですけれども、小中学校で連携を密にして情報交換して、一貫した指導をとなったはずです。現代では学力の問題で、小中一緒に算数・数学のカリキュラムを考える。一緒に授業を研究しないと点数が取れない。やると非常に良い結果が出る。言いたいことは、神田先生がおっしゃったように、新しい取り組みを進めるためには、今まであるものをスクラップしないと先生方はなかなか進めないだろうということで、私は減らせることはちょっと言ってないんですけれども、やはりしんどいけど頑張ろうという時には、目標があれば人間頑張れるけれど、ただやれと言われてなんですかこれみたいになったら元気出ないですよね。負担感は増えますよね。何のためにこれをやるのかということの了解を取るということが、スタートする前に、正に今の段階だと思いますけれども大事かなと。先生方の中に、これをやることの必然性というのはやはり腑に落ちてないとなかなか取り組みが進まないと思います。さっき言った茨木市の場合は、教育委員会の思いがあります。現場で非常に大変な思いしてやっている先生方がおる。この思いをこっちに伝えるときに、ここの中間点というか、そこに名前は忘れましたけれども各学校の代表者が出てきて、年間８回だったと思いますけれども、議論するというか一緒に考える学力向上担当者会議みたいな場を作って、委員会の思いをそこに伝える。ここであ

る雰囲気が醸成され、そういうことならやりましょうと現場が動いたという経緯がありますので、このビジョンを実際動かすときに、直ではなくてステアリンググループと言いますか組織を起動していくようなグループ作りというのが１つ大事かなと思います。

（丸山市長）
今はうちの場合はそういうのは想定してないんですよね。

（学校教育課長）
学力担当者会議というものがありまして、これも含めて校長先生だけでなくて各学校の担当者の方々。明日の講演会も実はその方々、プラス GIGA 端末で学校に配信しますので、より多く共有できるかなと。

（丸山市長）
今までもまだ試行で５学区でしたか、やってたんですけれども、それでも機能していたという理解でいいんですか。

（学校教育課長）
はい。

（丸山市長）
分かりました。岩間委員いかがですか。

（岩間委員）
私も志水先生のお話を聞いて一言。先生の理論とか今までの経験の中で、樹に例えて子ども達を教育する話は本当だなと思ったところです。この理想が酒田の子ども達にかえった時に、しっかりとした立派な樹が沢山育ってくれれば未来の酒田は明るいなというふうに思いました。やはりこの樹が育つためには土壌が大切で、その家庭だったりまち、地域だったりそういったところの小中一貫教育に酒田がこれから進んでいくんだよというところに、いかに周りの方々の理解と協力が必要不可欠だと思います。当該の小中学校、私は浜田小、二中、子どもは浜田小、六中に行ったり、そこに少し関わるところで連携できたらいいなと思うところもあったものですから、まずは目の前の問題、少子化で子ども達の数が減っていく中で、この選択をしなきゃやはりずっと子ども達を教育していくことは避けて通れない人口減少の中で、酒田市が先陣を切ってこのモデルがしっかりと先生たちも受け入れてくださって、その目的に向かって地域の方や保護者の方も応援してくださるようなものがどこの都市にも先駆けてできたら素晴らしいことだなと思っているところです。
総合教育会議の資料の４にもあるように、沢山の可能性のその中でも一番下の１５番のPTA組織の一本化といったものも、親御さんたちも６年間で終わって、中学校もまとめて色々

見ることができれば学校に対する理解度なんかも含めて、また良い事があるのかなというふうに思ったところです。やはり普段から忙しい先生方の中に、また更に小中一貫のためにやらなきゃいけないことが増えるのは本当に大変だなと神田先生のお話を聞きながらも思ったんですけれども、私もとある方から聞いたお話の中ですごくそうだなと思ったことがあって、蛇とトカゲの進化の話というのがあって、蛇とトカゲはどっちが先祖ですかという話で、市長はどちらだと思われますか。

（丸山市長）

難しい話ですね。どっちが先祖か。蛇が進化した方じゃないですか。トカゲが先じゃないかなと感じ的には思うんですけれど、恐竜に近いじゃないですか。恐竜の時代の時って蛇みたいな恐竜っていませんよね。ちゃんと足があって、トカゲも足があるじゃないですか。トカゲが先かなって、そのうち環境に慣れて手足必要なくなっていったのが蛇かなと思ったりもしますが。

（岩間委員）

まさしく正解で、大変って大きく変わるときに、変わらなくちゃいけない時に、あれこれ足して新しい機能に進化するよりも、無くてもいいものは無くてもいいよね。無くても生きられるのであればそういう形で時代に対応していって、生き延びたものが蛇であるという話を聞いたときに、先生たちにこれからやっていただくことは増えますけれども、小中一貫をすることで今やっておけば中学校の時にしなくてもいい苦労なんかもないんだよというところを気持ち的なところで感じていただければ進みはもっと早いのかなと思いました。

（丸山市長）

うちの場合って、小学校が中学校２つに分かれるところがありますよね。これはどう考えますか。大阪なんかはどうなのか分かりませんが、どうなんですか。

（志水教授）

色んなパターンがあって、いくつかの自治体は小中一貫の考え方を展開するときに、人口的に１つの中学校に２つの小学校という校区の線引きを変えたところもあります。私の故郷の西宮市というところは、非常に入り組んでいる感じがあって、未だに中学校に最大で６小学校から集まる。ここの小学校はこっちも行くし、こっちも行く。そういう入り組んだ形を修正できないでやっているので、実質難しいです。小学校の校長先生があっちの学校こっちの学校、会議に出ないといけないので、形を整えた方が、すなわち一中に対して２つとか３つとかの小学校が行くというのが理想的には望ましいですけれども、校区を改善するのはまた住民の皆さんの色んなご意見があるので簡単じゃないと思いますけれど。

（丸山市長）

ですから、来年の４月から本格施行するとしても、その課題をどうクリアするかというのは追って出てくるものですから、そこを教育委員会としてはどう描いているのか、やはり１つの中学校に小学校は固定して張り付くのか、そこがまだ分からなかったので。

（鈴木教育長）

今の件については、教育委員会の中で来年４月からスタートする子ども達が中学に上がっていくことになるわけですけれども、ですので１年遅れるということにはなるんですが、令和５年度から具体的に浜田小学校が二中と六中に分かれるとか、こういったところを解消していきたいなというふうには話をしていまして、そのためにはどういう手続きを進めていけばいいだろうかという話を始めたところです。

（丸山市長）

うちの川南地区は６つの小学校があって、必然的に第四中学校に皆行くわけですよね。これから話の中で義務教育学校みたいな話がいずれ進んでいくのか、おそらく単独で小学校は維持できなくなるんだろうなと思うので、行きつく先は義務教育学校になるのかなという思いをずっと持っていたんですけれども、ここから先色んな議論がこの小中一貫教育を進める中で出てくるんだろうなという思いがあります。義務教育学校について、先ほど小学校と中学校が１つの学び舎でまとまるというは義務教育学校という制度になっていくんだろうと思いますけれども、それはそれで特に価値は見出せるという理解でよろしいんですよね、基本的には。

（志水教授）

義務教育学校でリスタートする場合と、何とか小・中学校というのがありますね。

（丸山市長）

２つあるわけですか。

（志水教授）

はい。義務教育学校というのは２０１６年からできた新しい制度で、百何十校かだと思うんです。その前に、何とか小・中学校という、その場合は細かいことを言うと、人員配置が違ってたりするので義務教育学校でリスタートする場合と、小・中学校でリスタートする場合と両方のケースがあるようです、日本全体でいうと。

（丸山市長）

そういう面では、先ほど先生も触れられておりましたけれども、小学校文化と中学校文化の話があった時に、教員の異動については県教委が権限を持っているわけですよね、基本的にはね。市教委単独ではできないのだと思うんです。それも大きな課題。義務教育学校にな

った時とか、あるいは小中学校になった時とそうでないところと、先生はどうしても異動を伴うので、異動したときに本当にスムーズに繋がっていくのかというのも非常に心配だなというところもあるんですよね。小さい町だったらいいんですけれども、どうかなという心配もさっき先生方が両方経験するというのは確かにそれはいいけれども、基本的に酒田市教育委員会としてはこういう方針で行くというのを県教委にぶつけるというのは可能なんですかね。できませんよね、山形県の場合は。

（鈴木教育長）

要望として伝えていくことはもちろんできます。でも、県教委としてもこれから向かう方向としてはそうなんだろうと。どこの地区でも同じような課題はあると思いますので、やはり小学校と中学校の先生方が色々な意味で連携して取り組んでいくというのは、皆さんそれは必要なことだと考えてはいらっしゃるんですね。ただ、それを具体的にどうするかというのは別の問題になってくるので、だとすれば当然向かう方向としてはそういう方向に行かなければいけないと思います。

（丸山市長）

村上委員も教育のプロなのでぜひ。むしろ小中学校の現場を踏んでますので、いかがでしょうか。

（村上委員）

現場に居たものとして、先生方の今ってどんなだろうなって思った時に、やはり学習指導要領新しくなったものを抱えながら、また小中一貫も来てということで、学習指導要領を見たときに、小中学校を通して教育活動は主体的で対話的で深い学びということが示されているわけで、その主体的で対話的で深い学びを実現するということは、志水先生が教えてくださったまなびの樹ということと大きく関わってくるのかなというような、まなびの樹の根の力、幹の力、葉の力を豊かに成長させるための１つの手掛かりになるのかなと思いました。そうした時に、こうした学びは決して１時間の授業で完結するわけではなくて、単元を通して育てていったり育っていくものだから、そうした時に酒田市教委で行っている単元研究委嘱という事業はやはり大事にしたいし、それと絡めて酒田市では酒田市教育研究所というのがあって、それは教科ごとに国語なら国語の部会があって、小中の先生方が一緒に入って授業研究について話合うという場なので、そういったことも大事にしていかなくちゃいけないなと思いました。こうしてよく見ていったら、単元作りというのは子どもだけじゃなくて教師にとってもそれはこの根っこに書いてある自立しなくちゃいけないし、学校研究で先生方互いの意見を尊重し合ったり、また新しく単元を作っていく、そうしたことを考えたときに、県教委では学び続ける教師というのはよく新採の先生方にもお話するんですが、教師自身もまなびの樹を育てて、自分自身のまなびの樹を育てていかなくちゃいけないんだなと思って読ませていただきました。もう１点は、どうしても何かするとなると課題の方に目がいって

しまうんですが、良さを伸ばす、酒田市の子ども達の良さとか、酒田市の小中学校で取り組んでいるここは良いよというのは何だろうなと考えたときに、実は酒田市では私が３０代の頃から随分昔になるんですけれども、読書というのをとても大事にしてきました。読書はやっぱり語彙力とか文章力だけではなくて、人の生き方とか考え方を育てる上でとても大事なことではないかなと思います。この全国学調の調査の中で、小学校６年生の子ども達が国語の勉強は好きですかという問いに対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が全国平均では５４.８％だったのが、酒田市では７４.１％になってるんです。だからそういったことも私は単に授業だけではなく、読書の効用というのもあるのではないかなと思います。私が最後に居た学校では、リーディングバディーというものをやってたんです。リーディングバディーというのは、子ども達がお互いに本を読んであげる。６年生の子が１年生の子に本を読んであげるというというような取り組みでした。だから、この子にどの本がいいかなというのを選んで、選本から始めて読み聞かせしてあげる。とても良い取り組みが広がっている。また、酒田はミライニという素敵な図書館がこれから動き始めるので、そういった子ども達の良さを更に伸ばすということも大事な取り組みなのではないかなと思いながらお聞きしてました。

（志水教授）

リーディングバディーというのは初めて聞きました。それは何年生ですか。

（村上委員）

学校オープンでやるんです。上級生が下級生であったり、隣接学年であったり、それは様々です。

（志水教授）

山形県は国語の点とかあるんじゃないでしょうか。

（丸山市長）

そういう意味では私思うんですが、なぜ酒田市教育委員会全体のものとならないのか良く分からない。思いの強い校長先生がいたところはそういうことをやりますよと。でもそこで止まっちゃ本当に素晴らしいことだとするとどの学校にあったって良いわけですよね。なぜ広がっていかないのかなと。さっき教育研究所の話をされていましたけれども、これが良いとなれば皆各学校に広げればいいじゃないですかねと私は思ったりするんですけれど、それがその学校に留まっているってこと自体が、教育委員会が組織として機能してないんじゃないかってつい思うときがあるんですよね。教育委員に対して申し訳ないですけれども、もっとこの仕組みが良いというものだったら積極的に波及させればいいのに、そこだけで留まっててはは教育委員会という合議体の組織の意味がないんじゃないかなとちょっと思ったりするんですけれども、どうなんでしょうかね。

（鈴木教育長）

横展開で良いものをそれぞれの学校に広げようというのはもちろんその通りだと思いますし、実際取り組んでいるものも沢山あると思うんです。全部が全部ではなくてそうではないものもあると思いますけれども、各教科の先生方が集まって話をするときに、それいいねと言って広まっていく事って沢山あるので、だから教育委員会でこうしなさいと言うのではなくて、先生方が研究所の中で良いものはどんどんこういうふうに広まっていくというのが一般的なスタイルかなと思います。

（丸山市長）

でも、教育委員会の組織の中の一部として教育研究所ってあるわけです。形の上で。実際は自主的な集まりという感じなのかなという感じはしますけれども、教育委員会が指導的にあれせこれせという組織ではなくて、先生方の自主的な集まりとして教育研究所というのがあって、ただ条例からまだ消えてないですよね。やはり条例上あるということは教育委員会の中の１つの組織、機関として位置しているわけなので、教育委員会として全体のコンセンサスを取って、全部の中学校、小学校を横展開するというのはあってもいいんじゃないかなという思いがあったんですけれども。渡部委員いかがですか。

（渡部委員）

志水先生のお話今日初めてお伺いしたんですけれども、大変勉強になりました。ありがとうございました。志水先生が冒頭で樹に関することで材木屋という話をされてましたけれども、私さっき名刺渡したんですが生きた樹木を扱う造園の方ですから、どうしても樹について少し触れさせてもらいたいなと思ったんですが、私の職場に昔から色紙が１枚飾られてまして、すごく大好きな言葉が載っているんです。「花も実も根ありてこそ」という有名な園芸家の方が書いている言葉で、花も実も根っこがあってこそだよという言葉なんですけれども、目に見える花だったり立派な実を付けるのもやはり目に見えない根っこの力があってこそだよということを常にその言葉を見ながら仕事を私共の社員もしているんですけれども、その中でやはり根を伸ばすということは、やはり根を伸ばしやすい環境、土作り、土壌作りというのがやはり一番大切だろうと思ってます。伸び伸びと根を伸ばせるように幅広く伸ばす環境を作ることがやはり我々大人の使命なのかなと感じました。私、この小中一貫に関して子を持つ親の立場として捉えた時に、都市部の子ども達というのは家庭も小中一貫、中高一貫というのは受験してというか、選択をして進むわけですけれども、今回酒田市としては選択せずに中身は多少違えども全員が小中一貫に移行するということなんですけれども、親として考えた時に、小中一貫、酒田市は今学力が全国平均を少し下回っているという現状があるところから、学力向上の面で期待できるのかなというところは少しあるんですが、じゃあこの一貫教育を導入して何が変わるんだろうというのは親にとって少し見えない部分、これから説明はあるかと思いますが、やはり抽象的ではなくて具体的にどんなメリットがあってデメリットがあって、どんな取り組みをするのか子ども達にとってどんな成果が上がってくる

のかなというのが少し見えるといいなと思ったところです。こういう立場であるがゆえに、周りから来年から小中一貫始まるんだよねと、何が変わるのかなって聞かれると、なかなか返答に困ってしまうというか、現状ではですね。ですから、端的にというか具体的に小中一貫になるとこんなことが変わるんだよというような、どんなことが言えるのかなとアドバイスをいただきたいなと思ったのが１つと、あと地域にとって地域住民にとってやはり学校というのは今も昔も地域の中心であるわけで、これが小中一貫に移行することで行事がどう変わるのかなと、今まで防災とか安全の活動とか、歴史とか文化の継承とか色んな活動を取り組んできたわけですけれども、小中一貫なることで変わることがあるのかなと、何がどう変わるのかなと、やはりその辺も運用してからだんだん分かってくることかもしれないんですが、少し情報として地域の方にも分かりやすく端的にアドバイスできればいいかなと思ったので、少し教えていただければと思います。

（志水教授）

難しい質問で、どんなメリット・デメリットがあるんでしょうというのは正におっしゃる通りで、委員会の打ち出しと言っても分かりやすい形で保護者の方に打ち出す必要があるかなと改めて思いました。メリットは、先ほど大阪の事を言いましたけれども、その繰り返しになりますけれども、１つは小中一貫を先進的に進めているところは学力が上がってるんじゃないかなと言えると思います。でも、学力は点数を上げるためにやっているわけじゃないっていうことなんですけど、学力面での効果は絶対見込めると思います。あともう１点は、地元が兵庫県ですけれども、姫路市というところがありまして、姫路城で有名なところですが、１０年位前お城の跡のところの小中一貫校を訪問した時は、中学生でいわゆるやんちゃな子と言うんですか、勉強のモチベーションを無くしてちょっと斜に構えているような子がいたけど、１年生の小さい子が入ってきたらお兄ちゃんお兄ちゃんと慕ってくれるから、非常に表情も変わってしっかりしたというエピソードを聞きました。それは複数聞くので、何が言いたいかというと、学校の中で兄弟関係、年の離れた兄弟関係みたいなものができますので、特に年長の子について、弟や妹がいるのでちゃんと関わりを持ってしっかりやろうという良い影響が出てきているというはよく聞きます。私の知っている限りではそうです。行事がどう変わるのかというのは学校次第というかそこの校区の校長先生が中心かなと思います。判断次第かなと思いますけれど、校区の学校ではやはり運動会。小学校は小学校、中学校は中学校でやっているのを、私が知っているのは合同にしてもっと子ども、あるいは地域の住民の数が減っているところでは地域の運動会みたいなものがあるじゃないですか。それをある意味一緒くたにするということですけれども、くっ付けて実施しているところが結構多いですね。小中学生が一緒になったことで、新たな行事を起こすという場合もあると思いますし、それはもう非常にバリエーションが多いかなと思います。渡部さんに逆質問で申し訳ありませんが、土壌作りが最も大事だと、樹を扱うときに。特にここが重要だということありますか。

（渡部委員）
　そうですね。土壌を作るときは矛盾するんですけど、保水性があって透水性が良い。水持ちは良いけど、排水も良いというこれが大前提だと思います。一番大事なのは、肥料とか栄養分よりも保水性があり透水性があると。矛盾することなんですけれども、それを同時に効果を上げることが土壌作りは大切だと思います。

（志水教授）
　保水性、水をキープするんですね。

（渡部委員）
　一時的に水をキープして、更に。水が溜まることが一番悪い。排水が悪いことが一番樹にとって悪い。

（志水教授）
　なるほど。

（丸山市長）
　ちなみに、それをするためにはどうしたらいいですか。土の性質ですか。

（渡部委員）
　元々持っている土の性質を調査して、それが良ければそのまま使っていいわけですけれども、例えばものすごく粘土質で硬いような土壌がありますよね。これは完全に水はけが悪い土壌ですけれども、水持ちは良いですけど、水はけは悪い。それを良くするためには粘土質の土に砂を混ぜて土壌改良という土を混ぜることですね。混ぜて排水も良くする。

（志水教授）
　ありがとうございます。水が溜まるとよくないんですよね。

（渡部委員）
　根っこが腐ってしまいます。

（志水教授）
　子ども達に例えるとどうなるのかなと考えていました。それはどういう状態なのか。愛情をかけ過ぎたらダメということですか。

（渡部委員）
　いや、それは愛情たっぷりでいいと思います。

（丸山市長）

ありがとうございました。かなり時間を取らせていただきましたけれども、皆さんこれだけはお聞きしたいというようなことがあればどうぞ。私もずっと教育のことは考えてきたんですけれども、今回のこのお話の中で意欲というものを、習慣を通して意欲になるという本当にその通りだなと思います。意欲というのは言葉を置き換えるとやる気という言葉とイコールで繋いでいいのかどうかは分かりませんが、基本的にはやる気だと思うんですけれど、私が今まで参考にさせていただいた方の本によると、やる気を作るのに一番大事なのは人格だと言うんですよね。教育も結局それを進めるためにはまず人格教育があってそれが成り立つ。要するに、自分の人生をどうしようかとか、基本的には人格から発するというわけですよね。じゃあ人格教育って何で生まれるんだとだんだん遡っていくわけですけど、ここがよく分からないところがあって、結局おそらくこの子どもはおぎゃーと生まれて、人格が固まるのは DNA とか遺伝子的なものもあるのかもしれないですけど、基本は学校とか家庭とか地域になっていくんだろうと思うんです。だから教育委員会の中で、学校教育と社会教育がそれぞれ部門としてあるというのはそういうことなんだろうなと。小中一貫教育、学校教育の中で議論されてきたわけですけど、実際求める先というか、人格教育あるいはやる気を起こす教育だということでいくとすると、家庭教育の意味合いもすごくあって、社会教育部門でそれをどうやって生かしていくかというのも教育委員会の中で大きな課題としてこれから出てくるんじゃないかなと。学校が一生懸命やってても家庭で否定されたら子どもはおそらく人格は育たないんだろうなと。だからある意味、親、保護者もそれなりの責任を負わなきゃいけない。やる気を生むとか意欲をベースにした人格形成みたいなことを考えると。行政組織で考えると、学校教育としては小中一貫教育それと同じようにそれを車の両輪で支えるように教育をどうしていったらいいのかというところもやはりプログラムとして持たないとダメなのかなと。学校教育だけの問題では収まらないような気がするものですから、その辺について最後先生からご意見を聞かせていただいて、考え方があれば教えていただきたいなと思います。

（志水教授）

おっしゃる通りで、学校だけが重要なわけではなく、学校だけで何かができるわけじゃなくて、ずっと言われてきたことですけれども、学校と地域と家庭の３本柱ということですよね。面白いことを聞いたのは、高知県でこんな話をしたときに、その方は農業をやっておられる方でしたけど、３本の竹みたいな話をされたんですけど、高知県では柑橘類で「文旦」というのを育てている、作っていると。苗木がある大きさになった時に竹を組んでバランスよく支えるそうなんです。そうするとスッと伸びる。そのバランスが崩れると生育がなかなかしないということをおっしゃいました。その方は PTA の連合会の会長さんか何かでしたが、やはり学校と地域と家庭が３本の竹で、バランスよく支えると。学校だけ肥大してもダメで、家庭だけ肥大してもダメ。お母さんがしゃかりきになって長いことベタっと張り付いたご家庭もなくはないじゃないですか。絶対コケないようにするぞみたいなところも含めて、

それはやはり生育上あまり望ましくない。バランスが大事であるので、地域の役割、学校の役割、家庭の役割を考えていますというお話があって、非常に例えとしては秀逸かなと思いました。明らかに学力の形成についても地域の力、家庭の力、学校の力の総和として子どもが育つ環境が用意されているので子どもの樹が伸びているんですよね。ですので、市長は社会教育とおっしゃいましたけれども、我々でいうと地域の中の教育という言い方になるかもしれません。難しいのは、家庭の教育をどうするんだということで２つの見解があって、家庭は家庭の領分なので行政は立ち入るべきじゃないと考えるか、大阪では家庭の教育、家庭の力といった時に非常に不十分な家庭が多いので、必要なところは介入するんだという考え方がありますけれども、家庭教育をどういうふうに位置づけるかというのはやはり大きな問題で、オール日本で。やはり答えはバランスかなと思うんですけれども、大阪では家庭をサポートするところが非常に歴史的には重視されているんですけど。それぞれがスクラム組んで子どもの樹を育てるというのが結局はそういうことだと思います。

（丸山市長）

ありがとうございました。どうしても我々、家庭教育についても学校を通して、PTA を通して家庭教育の働きかけをするみたいなところがまだまだあるのかなと。そうではなくて、１つの部門として社会教育というところがあって、実は PTA も社会教育団体、環境団体ですよね。子ども会もそうですが、そういったところにもっといわゆる教育委員会の中でもいろいろな働きかけをすべきじゃないか、事業をやるべきじゃないかなというのがずっとあって、それでさっき言ったように地域と家庭と学校が子ども達の学力も含めてやる気を起こす意欲を持つ人生設計に後押しするようなことになるんじゃないかなと思いながら、ただ具体的に学校教育ほどシステマティックになってないんですよね、社会教育って。講演会やればそれで社会教育だということではないんだと思うんですけど、本来は社会教育をやる教育機関は公民館だったと。私も古い考え方があるものだから公民館がもっと機能しなきゃいけないんだけど、行政側の都合で公民館を全部無くしたじゃないですか。それでコミュニティセンター化してるわけですけど、それってどうだったのかなというのがあります。その考え方をこれからもう１回整理し直す必要があるんじゃないかなという思いもちょっとあるんですけどね。そんな思いを持って今回志水先生のお話とか教育委員会の小中一貫教育ビジョンを聞かせていただきました。大変勉強になりました。ありがとうございました。最後に教育長からまとめ的なところで少しお話を整理していただいて終わりたいなと思っております。

（鈴木教育長）

長時間に渡ってありがとうございました。冒頭でも申し上げましたけれども、この考え方を全ての先生方に染み渡らせるのに、もうしばらく時間がかかるというのが本当のところだと思います。ただその必要感については皆さん感じてらっしゃるのは間違いないと思っておりますので、根気よく取り組んでいきたいと思っております。その中で、家庭とか、地域、学校というお話がありましたけれども、市長から最後コミュニティセンターと公民館の話があ

りましたけれども、その頃から学校を核とした地域づくりなんて言葉が出始めたんですね。それまではたぶん公民館を核としていたと思うんですが、何もかにも学校がしなければならなくなってきたと個人的に考えていた時期がございました。何でもかんでも学校でやれというのは違うんじゃないかと思っていた時期もありましたが、とは言うもののそんな事は言っていられないので、今となっては地域にとって学校というのは非常に重要なものであるということも間違いないと考えておりまして、実は今日使うことはないだろうと思ってたんですが、こういう図がございます。どういう図かというと、コミセンもそうですし PTA もそうですし、地域に色んな資源となり得る人達がいるんですね。そこをかつては、学校支援地域本部事業なんて言いましたけど、今は地域学校協働本部なんて言い方してますけれども、例えば小中一貫で中学校区ができ上がったとしたら、そこにこういった人達を緩く束ねるような組織を作って、ここと学校の間をコーディネートしてくれる人がいたらいいだろうというのが、元々生涯学習政策局でも考えていたことなんですね。この辺りから実は初等中等教育局と生涯学習政策局が連名で文書を流すようになってきたのが多分１０年位前からだと思うんです。なので、今おっしゃってるように学校教育だけではなくて、社会教育と密接に関わっていかなければならないんですよとずっと言われてきた中で、今そこそこで具体的に取り組み始めているんだと思います。私としては、次に各中学校区で緩やかな実際活躍していただいている方々の集まる場、お互いに色んなことを言い合える場が、今あるものを束ねるだけですので、酒田市は元々こういうのがあるので、そういったことができればいいかなと思っています。元々酒田の良さをこれで活かせるんじゃないかと思っていて、それで困っていることを拾い上げられれば福祉の方とも繋がることもできるし、というようなことを考えていまして、この小中一貫が上手く各中学校区で軌道に乗っていった次はそれぞれの中学校で協働本部をぜひ作りたいなと考えておりました。またその際には皆さま方から色々なご意見をいただければと思ってますけれども、そうすると酒田らしくなっていくんじゃないかなと。各中学校区にこんなにコミセンがあって色々やり取りをしているのもなかなか無い地域だと思ってましたので、良さを発揮できればなと思っております。余計な話をしてしまいましたが、いずれにしても明日もまた志水先生には若浜小と二中の方をご覧いただいてアドバイスをいただくんですけれども、午後はまた小中の先生方から集まっていただいて、根気よく先生方の理解を深めながら進めていきたいと思います。加えて、いつも言われるので無くせるものを無くしていきたいと、ぜひ止めましょうと。先生方真面目なので何でもかんでもやってしまうので、これはもうやらなくていいよというのを言っていきたいなと思ってお話を聞いておりました。今日はありがとうございました。

（丸山市長）

ありがとうございました。最後の話も私もそうだねと思いましたので、また総合計画の中に教育委員会も入っていますので、ぜひ議論していただいて活かせるものは活かしていきたい。小中一貫教育の先にあるものを見通して必要かなと思いましたので、よろしくお願いしたいと思います。志水先生本当にありがとうございました。長時間に渡って意見交換させて

いただきまして、また明日もご指導いただけるということで、どうぞよろしくお願いいたします。

４　閉会

（池田教育次長）

それでは、事務連絡ですけれども、次回の会議につきましては具体的な開催日時、協議事項等につきまして、改めて事務局よりご連絡申し上げますのでよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、令和３年度第２回酒田市総合教育会議を閉会いたします。